

まえがき

「文法」とは、事態を表示する単位としての文を構成する単位である語や形態素が、事態の全体的特性を決定する機構を記述し説明するための論理的な枠組みである。事態の全体的特性としては、文の作成者である発信者の、伝達される事態に対する態度(平叙文、疑問文、命令文など)、事態を構成する語や形態素の分類(品詞または語類)、事態を構成する要素としての事物の事態中での機能(意味役割)、事物の間にある関係の分類、事態が成立する時間や空間、事態が現実世界やそれ以外の世界において成立する可能性、事態が成立する様態などがある。これらの特性が文法的特性や文法的機能と呼ばれるものであるが、文法的特性を表示するための形態的あるいは構造的手段は言語によって異なっている。英語が文法的特性を表示するための手段としてどのようなものを選択しているのかを解説することが、本書の目的である。

英語もその一員であるインド・ヨーロッパ語族は、古典ギリシア語やラテン語に見られるように、文法的特性を、専ら名詞や動詞の語形変化(活用)によって表示していた。一方、日本語やモンゴル語、トルコ語などの言語は、助詞や助動詞のような文法的特性の表示に特化した形態を用いて表示するし、中国語やベトナム語などの言語は、助詞や助動詞に加えて語の配列規則(構造)によって表示する方法を選択している。現代の英語は、名詞や動詞の語形変化を一部残しながらも、主語や目的語などの重要な意味役割を文の構造によって表示するほか、事態の成立可能性を表示するために極めて多様な助動詞を使用するし、事態が成立する時間を表示する形態的な機構である時制体系は、世界の他の言語には例を見ないほどに複雑かつ精密である。

このため、ギリシア語やラテン語の文法が名詞や動詞の語形変化の記述を重視し、日本語の文法が助詞や助動詞の機能の記述に偏りがちであるのに比べると、英語の文法は語形変化、助動詞や助詞(前置詞)の機能だけでなく、形態が配列される規則と、その結果としての構造が表示する事態の特性にも重要な配慮を怠ることが許されないものである。この観点からすると、英語の文法を適切かつ十分に記述することは、人間の言語の文法が選択しうる手段の非常に多くの部分を網羅することに等しく、他のどの言語に比べても取り扱うべき項目の数が多種多様であり、内容もこれに応じて複雑になる。英語で使用されるために用意されている語彙の量は、他のどの言語をも凌駕すると言われるが、記述すべき文法項目の量に関しても同様である。本書が個別言語の文法書としては分量が多いのも、英語の文法のかかる性質による。

適切な文法の提示において重要なのは、各項目で述べられる記述に対する論理

的・合理的な説明が与えられているということである。項目の記述は例文を提示することによってなされるのが通常であるが、例文に対して日本語訳を加えるだけでは説明したことには決してならない。例文が文法的に適格であり、その例文が表示する事態が理解可能であることを証明してはじめて、文法項目とその例文に対する満足すべき説明が完了する。本書では提示した例文のすべてに、文法的・意味的観点からの合理的な説明を与えている。そして、説明に使用される表現は、人間の言語の普遍的特性を厳密に研究する学問としての言語学的観点から、精密な吟味を経て選択されたものでなければならない。そうでなければ説明は、受け手の曖昧にして不正確な直観に依存するだけの、合理性からは遠く離れたものになりかねない。本書で採用している説明の用語や枠組みは、従来の文法書のものとは異なるものも多いが、それは筆者がこれまでに考察してきた言語の普遍的機構を記述する枠組みに基づくものである。この枠組みの合理性は、本書において適切に反映されているものと信じる。

本書を刊行することができたのは、研究社編集部の佐藤陽二氏と中川京子氏の多大なるご支援があったからである。お二人には心からの謝意を表する。

令和6年12月

町田 健

目次

まえがき	iii
------	-----

第1章	英文法の特徴	1
-----	--------	---

第1節	類型の特徴	1
第2節	文を構成する単位	2
第3節	品詞	5
第4節	文の構造	5

第2章	文の要素	10
-----	------	----

第1節	文	10
第2節	語	12
第3節	句	17
第4節	群	20
第5節	節	22

第3章	文の種類	33
-----	------	----

第1節	平叙文	33
第2節	疑問文(真偽疑問文・疑問詞疑問文)	34
第3節	感嘆文	36
第4節	命令文	37

第4章	文の構造	39
-----	------	----

第1節	文を構成する要素	39
第2節	文の構造	47

第5章	名詞	83
-----	----	----

名詞の分類	83
-------	----

第 6 章	意味役割と前置詞 108
第 1 節	意味役割……………108
第 2 節	前置詞……………109
第 7 章	冠詞 175
第 1 節	定性……………175
第 2 節	冠詞：定冠詞と不定冠詞……………177
第 3 節	冠詞の不使用……………195
第 8 章	代名詞 207
第 1 節	代名詞と代用表現……………207
第 2 節	代名詞の分類と形態……………210
第 3 節	人称代名詞……………213
第 4 節	指示代名詞……………232
第 5 節	再帰代名詞……………245
第 6 節	不定代名詞……………258
第 7 節	疑問代名詞……………279
第 8 節	関係代名詞……………299
第 9 章	数量詞 331
第 1 節	数詞……………331
第 2 節	不定数量詞……………333
第10章	動詞と助動詞 369
第 1 節	動詞と助動詞の分類……………369
第 2 節	動詞の形態と特性……………383
第 3 節	助動詞の形態と特性……………388

第11章	時制とアスペクト 430
第 1 節	英語の時制とアスペクト……………430
第 2 節	時制・アスペクト形態とその機能……………431
第 3 節	従属節中の時制……………509
第12章	態 527
第 1 節	態の定義……………527
第 2 節	受動態……………528
第 3 節	使役態……………549
第13章	不定詞 557
第 1 節	不定詞節の構造……………557
第 2 節	不定詞の時制とアスペクト……………559
第 3 節	不定詞節の名詞的機能……………565
第 4 節	不定詞節の形容詞的機能……………569
第 5 節	不定詞節の副詞的機能……………571
第14章	動名詞 584
第 1 節	動名詞節の形態……………584
第 2 節	動名詞節の機能……………585
第15章	分詞 596
第 1 節	分詞節の形態……………596
第 2 節	分詞節を含む表現の構造……………597
第 3 節	事物の特性を限定する分詞節……………599
第 4 節	事態の特性を限定する分詞節……………604
第16章	法 613
第 1 節	法の定義……………613

第2節	接続法の形態	614
第3節	接続法単純形1式(仮定法現在)	615
第4節	接続法単純形2式(仮定法過去)	622
第5節	接続法複合形(仮定法過去完了)	632

第17章 形容詞 641

第1節	形容詞の性質	641
第2節	形容詞が作る構造	644
第3節	形容詞の名詞的機能	655

第18章 副詞 659

第1節	副詞の性質と分類	659
第2節	副詞の機能	661
第3節	副詞の位置	676

第19章 比較 693

第1節	比較の本質と機能	693
第2節	比較級	700
第3節	同等比較級	721
第4節	最上級	727

第20章 否定 736

第1節	否定の本質	736
第2節	否定文の構造	748
第3節	否定の強調	760
第4節	部分否定	761
第5節	二重否定	765
第6節	否定辞と連言・選言	767
第7節	否定文と同様の事態を表示する肯定文	769

第21章 接続詞と節 772

第1節	接続詞とその分類	772
第2節	等位接続詞	775
第3節	従属節	784

第22章 話法 806

第23章 倒置、焦点化 817

第1節	倒置	817
第2節	焦点化	824

用語解説	831
索引	844

第 1 章 英文法の特徴

第 1 節 類型の特徴

英語はインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派に属する言語であり、この語族に属する古典ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語などの古典語の特徴は、名詞や動詞が、表示する文法的機能に応じて複雑な語形変化をすること、つまり屈折語としての特性を示すことである。英語も、古英語と呼ばれる 12 世紀半ば頃までは屈折語的な特徴を有していた。しかし現代の英語は、名詞は単数形と複数形が形態的に区別されるだけであり、意味役割を表示する機能を持つ格を形態的に表示することはない。動詞も、単独の語形変化によって表示するのは一部の時制と人称・数だけであり、古典諸語に比べると語形変化は非常に単純である。

名詞や動詞の語形変化が完全に失われているわけではないが、主要な意味役割や法、時制・アスペクト、態などの文法的機能が語形変化によって表示されることはないので、言語類型的な観点からすると、英語は屈折語ではなく、中国語やベトナム語、タイ語のような孤立語に近い特徴を示すと考えることができる。

孤立語の最も顕著な特徴は、主語と目的語を表示するための形態的手段がなく、文の構造(語順)によってこれらが表示されるということである。すなわち、「名詞 1 + 動詞 + 名詞 2」という構造によって、名詞 1 が主語、名詞 2 が目的語であることが表示される。英語も、動詞に先行する名詞が主語、動詞に後続する名詞が目的語というように、文の構造によって主語と目的語を区別するので、この点では孤立語としての特徴を示している。

また孤立語では、主語と目的語以外の意味役割は、基本的には名詞に先行する位置に配置される前置詞によって表示される。英語も、場所は in, on, at など、手段は with、着点(目的地)は to や for などというように、やはり前置詞を用いて意味役割を表示するので、ここでも孤立語と共通する特徴を持つ。

したがって、英語は起源的には屈折語に属していたが、名詞や動詞の語形変化がほとんど失われたことにより、現代では孤立語としての特徴を強く示すようになっていると見なされる。

第2節 文を構成する単位

文は事態を表示する単位であり、事態を音声または文字によって発信者(話し手、書き手)から受信者(聞き手、読み手)へと伝達するのが言語であるから、英語も言語である以上、事態を表示する言語単位としての文を有している。

事態の中核は主体である事物と副体である事物との間にある関係である。「主体」は伝統的に「主語」と呼ばれてきた事物である。「副体」は、従来の「補語」や「目的語」に当たるが、「自動詞」と呼ばれている対象も副体に含まれる。主体と副体については、後に詳しく説明する。

(1) George Washington is the first President of the United States.

ジョージ・ワシントンは合衆国初代大統領だ。

(2) John is a student. ジョンは学生だ。

(3) Birds fly. 鳥は飛ぶ。

(4) Mary made an apple pie. メアリーはアップルパイを作った。

(5) John met Mary. ジョンはメアリーに会った。

(1)は、George Washington である人間と、the first President of the United States (合衆国初代大統領)である人間が同一であるという関係を表示している。主体と副体が同一であるという関係を「同値関係」と呼ぶ。

(2)は、John である人間が、student (学生)である個体の集合の要素であるという関係を表示している。主体が副体の要素である、つまり副体に含まれるという関係を「包含関係」と呼ぶ。

(3)は、bird (鳥)である個体の集合が、任意の時に飛ぶ(fly) 個体の集合の要素であるという関係を表示しており、主体が副体の要素であるから、この場合も関係は包含関係である。

(4)は、Mary である人間と apple pie (アップルパイ)である個体との間に make (作る)という関係が成立したことを表示している。主体が副体に作用を及ぼすという関係を「単射関係」と呼ぶ。

(5)は、John である人間と Mary である人間との間に meet (会う)という関係が成立したことを表示している。この場合、主体と副体を交換しても同じ関係が成立する。実際、次の文は(5)と同一の事態を表す。

(5') Mary met John.

このような、主体と副体が相互に作用を及ぼす関係を「双射関係」と呼ぶ。

文が表示する事態は、同値関係と包含関係の場合は主体と副体を表す単位、単射関係と双射関係の場合は主体、副体、そして関係を表す単位を必ず含んでいなければならない。したがって、文は少なくとも2個または3個の下位単位によって構成されることになる。

このような下位単位が John, Mary, student, fly, made, met などの表現であるが、これらの表現は、これより小さな単位に分割することは出来ない。文を構成する最小の基本的単位を「語」または「単語」と呼ぶ。全ての言語について、文が下位の単位によって構成されるという特性は共通であり、英語もまた例外ではない。

また、George Washington, the first President of the United States, a student, an apple pie のような表現は複数の語によって構成されているが、全体として主体や副体を表しており、この点で単独の語と同様の働きをしている。このように、複数の語によって構成されているが、語と同様の機能を持つ単位を「句」と呼ぶ。

同値関係と包含関係を表示する文の場合、必須の要素は主体と副体だけだから、文を構成する語または句(以下「語句」とする)は最低2個あればよい。実際(3)のように副体が動詞である時は、文が2個の語句によって構成されている。しかし、同値関係を表す(1)、包含関係を表す(2)については、主体と副体を表す語句に加えて、is という語が用いられている。この is は不定詞が be である動詞(be 動詞)の現在時制3人称単数形であるが、この動詞本来の意味である事物の存在ではなく、事態が現在において確実に成立していることを表示している。

主体である事物と副体である事物が同一である、または主体である事物が副体である事物の集合に含まれるという関係を表す文では、主体と副体は名詞によって表示される。英語の名詞は事物または事物の集合を表すという機能を持つが、名詞のみでは事態の成立時や成立可能性などの特性を表示することができない。この点で、副体である名詞に助動詞などを付加することで、事態の特性を表示する仕組みを持っている日本語と英語は異なる。

(1)と(2)では、「合衆国初代大統領だ」「学生だ」のように、名詞に助動詞「だ」を付加することにより、事態が現在において確実に成立していることが表示される。また以下の例のように、「だ」の後にさらに別の形態を付加することも可能である。

(6) a. ジョンは学生だった。

b. ジョンは学生だろう。

c. ジョンは学生ではない。

これらの文が表示するのと同様の意味を英語で表すために使用されるのが be 動詞である。

(6') a. John was a student.

b. John may be a student.

c. John is not a student.

be 動詞の語形変化、be 動詞への助動詞や副詞(否定辞)の付加によって、同値関係や包含関係を表示する事態の特性が表示される。

第11章 時制とアスペクト

英語には直説法と接続法(仮定法)という法の区別があり、どちらの法でも時制とアスペクトが区別される。ただし、直説法の時制・アスペクト体系は仮定法のそれに比べるとはるかに複雑であり、また同じ形態でも直説法と仮定法では機能が異なる。本章では、直説法の時制とアスペクトについて解説する。

第1節 英語の時制とアスペクト

① 時制

時制は、事態が成立する時区間を表示する形態的機構である。事態が成立する時区間を決定する基準となるのは現在の時点であり、現在に先行する時区間が「過去」、現在に後続する時区間が「未来」である。さらに、現在以外の時区間を基準として事態の成立時区間を規定することも可能である。

こうして規定された事態の成立時区間を表示するための言語形態の機構が時制である。事態の成立時区間を理解させる要素としては、時制だけでなく、アスペクトや動作態も含まれるので、言語によって時制機構は異なる。中国語のように時制を持たない言語から、英語や古典ギリシア語のように、複雑な時制を持つ言語まで、時制を形態的に表示する機構は多様である。

英語の時制は、現在、過去、未来のそれぞれを基準として分類される。

i. 現在を基準とする時制

現在、現在完了

ii. 過去を基準とする時制

過去、過去完了、過去未来

iii. 未来を基準とする時制

未来、未来完了

② アスペクト

アスペクトは、ある与えられた時区間において、事態の全体が成立するののか、事態の部分しか成立しないのかという特性である。すべての事態は始まってから終わるのが普通であり、したがって事態の全体が成立するのだが、時区間を限定

すれば、その時区間において事態の全体が成立するとは限らない。現在は長さのない時点なので、長さを持つ時区間において成立する事態であれば、現在においては部分のみが成立する。1日や1週間のような長さを持つ時区間を設定すれば、事態の全体がその時区間の一部または全体において成立することができる。

アスペクトは事態の全体または部分という2つの区分のみであるが、アスペクトについても、これを形態的に表示する言語と表示しない言語がある。ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシア語などの言語ではアスペクトを形態的に区別しない。日本語は「走る」と「走っている」「走っていた」のように「ている」「ていた」という形態を付加するかどうかによって、アスペクトが形態的に区別される。

事態の全体を表示するアスペクトを「全体相」、事態の部分を表示するアスペクトを「部分相」と呼ぶ。英語はアスペクトを形態的に区別し、動詞群が「助動詞 be+現在分詞」という形態である場合が部分相、そうではない場合が全体相である。部分相形態は、伝統的に「進行形」と呼ばれているものと同じである。

アスペクトは、時制形態の一部だと見なされることもあるが、どの時区間において成立するのであれば、事態の全体と部分を区別することは可能であるから、時制とアスペクトは事態の異なった時間的特性だと考えなければならない。

第2節 時制・アスペクト形態とその機能

① 現在時制・全体相

i. 均質動詞

現在は長さのない時区間、すなわち時点なので、長さを持つ時区間において成立する事態の全体は、基本的には成立することができない。しかし、動詞が均質動詞、すなわち事態の動作態が均質であれば、事態の全体(全事態)と事態の任意の部分(点部分事態・線部分事態)が等しいので、現在時制全体相形態によって、現在において点部分事態が成立していることを表示することができる。現在の時点を含む長さを持つ時区間を「現在域」と呼ぶことにすると、均質動詞の現在時制全体相形態は、現在域において成立する線部分事態を表示することもできる。現在域は現在を中心とした時区間であるが、その長さは本質的に不定である。

(1) Mary is a student of the college. メアリーはその大学の学生だ。

(2) I love Bach's cantatas. 私はバッハのカンタータが好きだ。

(3) John believes that God exists. ジョンは神が存在すると信じている。

(1)の is は包含関係を表示する均質動詞であり、この文が表示する事態の動作態は均質である。「メアリーがその大学の学生の集合に含まれる」という事態の全体は、通常は数年間の時区間において成立するが、現在における点部分事態と

用語解説

▶アスペクト

事態の全体が表示されるか、部分のみが表示されるかの区別。事態の全体を「全体相」、事態の部分「部分相」と呼ぶ。英語では進行形が部分相を、非進行形が全体相を表示する形態として使用される。

▶意志動詞

人間が脳内に作り上げた世界で成立する事態が、現実世界において、その人間が意志的に作用を及ぼすことによって成立することを表示する動詞。意志動詞によって表示される事態の主体は人間であることが期待されるが、英語では意志を持たない無生物もこの種の事態の主体となることができる。

▶意味役割

名詞が表示する事物が、事態を構成する要素となるときに持つ機能。文中で使用される動詞を決定する機能を「主体」、主体と何らかの関係を持ち、主体と共に動詞を決定する機能を「副体」と呼ぶ。もっとも重要な意味役割は主体と副体であるが、これ以外に、移動の目的地である「着点」、移動の出发点である「起点」、事態を成立させる「手段」、事態の成立への「関与者」などがある。

▶可算個体名詞

可算普通名詞のうち、集合名詞を除く、相互の境界を明確に区別できる個体の集合を表示する名詞。tree (木)、table (テーブル)、cat (猫)、boy (少年) など。

▶可算普通名詞

相互の境界が明確で個数を数えることができる個体の集合を表示する名詞。集合の要素が個別の個体である可算個体名詞と、集合の要素が個体の集合である集合名詞が可算普通名詞に含まれる。

▶可能世界

事態の成立に関わる、時間と空間を含むすべての事物によって構成される状況を「世界」と呼ぶ。事態を表示する文の発信者が含まれる世界は「現実世界」であり、この現実世界を含む、人間が想像することのできる世界が「可能世界」である。可能世界は、現実世界と類似していることもあれば、物理法則が成立しないような、現実世界とは全く異なる世界である場合もある。

▶関係動詞

動詞が表示するのは事態の副体(主体が包含される事態の集合)または主体と副体の間に成立する関係であるが、そのうち関係を表示する動詞を「関係動

索引

- ▶ 項目は五十音順→アルファベット順に並んでいます。
- ▶ 数字はページ数です。太字の数字は主記述のある箇所を示しています。
- ▶ *はその項目が用語解説に採録されていることを表しています。

【あ行】

*アスペクト 21, 379, **430**

意志 **405**

*意志動詞 **374**

1人称 213

*意味役割 **108**

【か行】

過去完了時制 **488**, 494

過去時制 446, 453

過去分詞 596

過去分詞節 600, 601, 603, 605

*過去未来完了時制 **509**

*過去未来時制 **506**

*可算個体名詞 **84**, 85

加算の全体 **350**

*可算普通名詞 **83**, 85

可算名詞 **83**

仮定法 **613**

仮定法過去 614

仮定法過去完了 614

仮定法現在 614

*可能世界 **349**, 388, 613

下方値 **361**

関係節 23, 43, 79, 515, **802**

関係代名詞 **24**, 212, **299**

*関係動詞 **370**

関係副詞 24

冠詞 5, 175, **177**

冠詞の不使用 195

間接疑問節 **281**, 283, 285, 288, 290,

292, 295, 298, **787**

間接話法 **806**, 807

感嘆文 **36**, 70

*関与者 **108**, 163

*疑似現実世界 **615**

基準空間 111

基準時区間 137

基数詞 **331**

*起点 **108**, 147

義務 **412**

義務の倒置 818

疑問形容詞 **69**

疑問形容詞句 70

疑問詞 7

疑問詞疑問文 **7**, **35**, **56**, 65

疑問詞節 **78**

疑問代名詞 **212**, **279**

疑問副詞 289

疑問副詞句 70

疑問文 **7**, **34**, 56

疑問名詞句 **70**

強調 7

強調構文 824

許可 **422**

*極性 5, 753

*均質抽象名詞 **100**, 101, 179

*均質動詞 **377**, **431**, 439, 446, 453, 458,

465, 472, 483, 488, 494, 498, 502

*句 **3**, **17**, 39

空間 110, 124

句動詞 **169**, 384

*群 **17**, 20, 39

群動詞 **169**, 384

形態素 **12**

形容詞 **5**, **641**

*形容詞句 **18**, 74

形容詞的機能(不定詞節の) 569

結果 571, 572

結果事態 27, **444**

現在域 **431**

現在完了時制 **472**, 483

現在時制 431, 439

現在分詞 596

現在分詞節 599, 600, 602, 604

*現実世界 **348**, **388**, 613

*限定機能 **802**

*限定者 **108**, 164

語 **3**, 12

*後件 **265**, 521, **623**

肯定文 **34**

個体集合 83, 94

固有名詞 **84**, **96**, 182

【さ行】

再帰代名詞 **209**, 211, 245

最上級 697, **727**

3人称 216

*使役者 **549**

*使役態 **527**, **549**

使役文 **527**

時区間 **86**

指示代名詞 **211**, **232**

*時制 379, **430**

時制の一致 **510**

事態間の関係 27

*事態副詞 **661**

従位接続詞 **774**

*集合名詞 **84**, 89

従属節 **22**, **773**, 784

主格 **210**

主節 22, **773**

*主体 **2**, 108

*主体名詞句 **6**

*主体名詞節 617

*手段 **108**, 161

述語 **4**

受動態 **527**, 528

受動文 **527**

受動分詞 596

*準名詞節 **42**

条件 25

条件節 265

*焦点化 **824**

*it 焦点化構造 **824**, 825

*what 焦点化構造 **824**, 829

上方値 **357**

序数詞 **331**, 332

助動詞 **5**, **379**

所有代名詞 **211**

真偽疑問文 **7**, **34**, **56**, 59

進行形 431

随意的倒置 822

数詞 **331**

*数量詞 **5**, **331**, 747

成立可能性 5, 20, 25, 388

*成立空間 **108**, 110

成立時 5, 20, 25